

縦横

リングを前に腰を抜かしたボクサーよろしく政権放擲の安倍晋三氏にかわって、福田新政権が誕生するや永田町界限に「戦後レジームからの脱却」という旗印はすっかり消え失せた。これで当面、改憲論議や軍靴の音も遠のいたかと、あれほど目くじらたてていた反対派もしばらく春眠暁を覚えずという雰囲気に見受けられる。

しかし、油断してはいけない。この国の民は、外界から何か新しいものが現れると、実にあっけらかんとこれを受容する。芝浦の海に黒船が現れると周章狼狽する武士階級を尻目に庶民は弁当もって見物に行く。新橋・横浜間を弁慶号が黒煙を振りまきながら走れば、重箱にご馳走を詰めて乗りに行ったのは下町のおばさんたちだった。極めつけは、進駐軍の持ってきた民主主義だ。巨大なゴミ箱のように何もかも受容するが、決してこれを構造化して、血としたり肉としたりすることはない。

「改革なくして成長なし」と叫んだ小泉内閣は道路特定財源を蛇蝎の如く嫌っていたのに、いまや党を挙げてその必要性を説く。郵政民営化反対で除名したものを復党させて堂々と公認する。この融通無碍こそ、われらの真骨頂なのだ。

フランス文化を礼賛し、ロダンとフランスに魂を捧げていた芸術家高村光太郎は、1941年12月8日、突如、「天皇あやふし。／ただこの一語が／私の一切を決定した。／子供の時のおぢいさんが、／父が母がそこに居た。／少年の日の家の雲霧が／部屋一ぱいに立ちこめた。／私の耳は祖先の声でみたされ、／陛下が、陛下がと／あへぐ意識は眩いた。」と詠った。以来彼は戦争に協力し、戦争未亡人の家庭を慰める行脚の末に山梨をも訪れ、増穂町上高下から富士の眺望を見た記念が、今現地に碑となって残っている。無残な敗北によって戦争が終わると、詩人は「日本はつひに赤裸となり、／人心は落ちて底をついた。／私の眼からは梁が取れ、／いつのまにか六十年の重荷は消えた。／再びおぢいさんも父も母も／遠い涅槃の座にかへり／私は大きく息をついた。」こう詠って、再び閑にフランスとロダンの思い出に帰っていったのである。(引用はすべて『暗愚小伝』)

